

# 小笠原のやっかいもの『アカギ』で ギターを作ってみた！



クラシックギター「バレリーナ」  
(2017年父島産、母島産アカギ使用)



アカギの成木（母島）



アカギの断面（母島）



「天使の椅子」すまうと のぎむら あつし 野木村 敦史  
(2017年父島産アカギ使用)



「リンゴのあるアカギスツール」  
原口 健一  
(2016年母島産アカギ使用)

小笠原諸島は大陸と一度も陸続きになったことがなく、動植物が独自の進化を遂げたことから固有種が多く生息・生育していますが、これらは外来種との競争に弱く、外来種の増加による固有種の衰退が深刻な状況となっています。その外来種の1つが小笠原のやっかいもの『アカギ』です。

アカギは1900年頃に燃料用材確保のため人為的に小笠原諸島に導入されましたが、今では利用されず、旺盛な繁殖力により在来種の生育地を圧迫していることから、伐採による駆除を行っています。しかし、伐採後の活用方法がなく積極的に駆除が行われるには至っていないのが現状です。

そこで伐採したアカギの活用方法の一つとしてSAKUWOOD認証協議会が公益社団法人国土緑化推進機構の助成を受け関係者の協力のもと作成したのが、

クラシックギター『バレリーナ』です。ボディ、ネック、指板、しぼん側板すべてに小笠原のアカギが使用されています。ソリッドで芯のある音質で特に高音域が美しく中低音域も安定しているため、小ぶりのボディサイズですが安定感のある演奏が可能です。

アカギは、高級材であるマホガニーやローズウッドと同様に楽器材として優れているだけでなく、これらと似たような赤味と光沢があり、家具製品への活用も期待されています。

また、マホガニーやローズウッドは絶滅のおそれがあることからワシントン条約の規制対象となっています。これらの代わりに国内で外来種として伐採されているアカギを有効活用することができれば、小笠原のみならず海外の生物多様性を保全することにもつながります。